

1.鳥取橋遺跡第2次発掘調査報告

1. はじめに

今回の調査は、一般国道482号道路新設改良事業（丹後弥栄道路）に伴い、京都府建設交通部の依頼を受けて実施したものである。

鳥取橋遺跡は、京都府京丹後市弥栄町和田野車田から井辺森山にかけての遺物散布地である。鳥取橋遺跡の周辺は、竹野川とその支流である鳥取川・木橋川・奈具川などによって形成された沖積低地が広がっており、現在は水田として利用されている。この沖積低地は東西1～1.5kmの幅をなしており、鳥取橋遺跡はこの沖積低地のほぼ中央部に位置している。1961年に竹野川堤防の基部あたりで縄文時代ないし弥生時代前期と推定されるほぼ完形の土器1点が採集されたことから、散布地として認知された。

今回の調査は、平成22年度の5月から7月にかけて実施した鳥取橋より北側の第1次調査に次ぐもので、鳥取橋より南側が調査対象地である。第1次調査では河川堆積の中から弥生時代前期～中世にいたる遺物が出土したが、顕著な遺構は確認できなかった。

現地調査は、平成22年11月17日に着手し、12月21日にすべてを終了した。

調査期間中は京都府教育委員会、京丹後市教育委員会、京丹後市弥栄市民局をはじめとする関係諸機関、地元自治会からご教示、ご協力をいただいた。また、発掘調査には調査補助員・作業員として地元の方々に参加していただいた。

なお、調査にかかる経費は、全額、京都府交通建設部が負担した。本報告は石尾が執筆した。

現地調査責任者 調査第2課長 肥後弘幸

調査担当者 調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛
同 専門調査員 石尾 政信

調査場所 京丹後市弥栄町和田野車田内

現地調査期間 平成22年11月17日～12月21日

調査面積 285㎡



第1図 調査地と周辺遺跡
(国土地理院 1/50,000 網野・宮津)

2. 調査成果

道路予定地内では、すでに進入用仮設道路等の工事が行われていたため、仮設道路を避けて7か所の調査トレンチを設定した。トレンチは北から1～7トレンチと呼称する。

調査は、各トレンチを重機により掘削を行い、安定した地盤を探し、その後人力で掘り下げながら遺構・遺物の検出に努め、遺構・遺物の記録を作成するものである。しかし、今回の調査では、安定した地盤がほとんどのトレンチで確認できなかった。各トレンチから少量の土器片が出

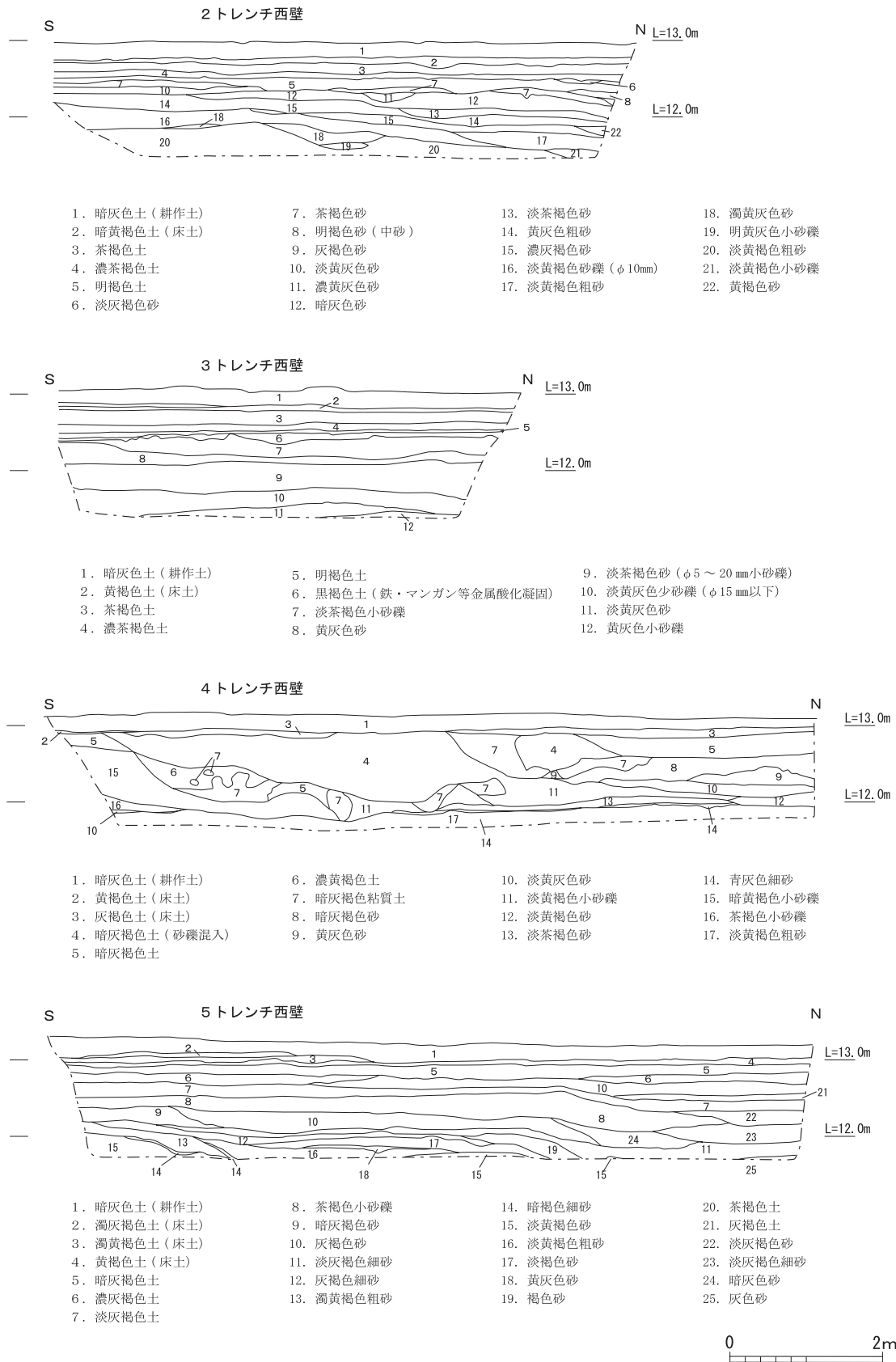
土したが、遺構に伴うものでなく周辺から流入したものであった。このため、各トレンチの位置と規模の測量、堆積状況の記録(図面・写真)を作成する作業を行った。各トレンチの堆積状況は以下のとおりであった。

1 トレンチ 鳥取橋の南西の水田に設定した5×5mのトレンチである。地表面の標高は約12.6mで、地表から1.4mまで重機で掘削したが、顕著な遺構は検出されなかった。周辺の工事のための排土置き場となるため、写真撮影後すぐに埋め戻した。トレンチ壁面の土層堆積状況は、暗灰色土(耕作土)・濁赤褐色土(床土)の下に、3層の灰褐色土・暗灰褐色土が堆積していた。旧耕作土と思われる。その下に淡褐色・褐色の砂質土、暗灰色・暗青灰色の粘質土が堆積する。旧耕作土層から近世陶器(すり鉢)が出土している。小片のため図化できない。

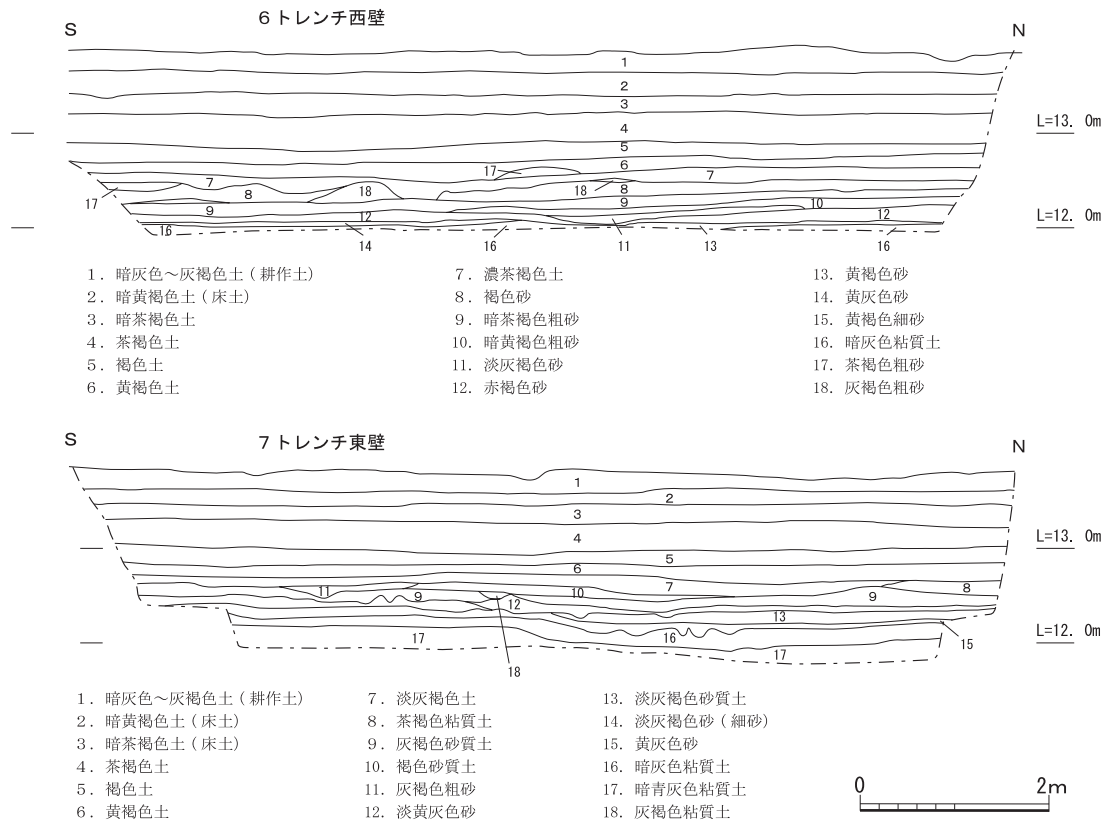
2 トレンチ 鳥取橋から250m南の水田に設定した4.5×7



第2図 トレンチ配置図



第3図 2～5トレンチ土層図



第4図 6・7トレンチ土層図

mのトレンチである。地表面の標高は約13mである。標高11.5mまで掘り下げたが遺構は検出していない。トレンチ西壁の堆積状況は、暗灰色土(耕作土)・暗黄褐色土(床土)の下に、茶褐色土(3層)・濃茶褐色土(4層)・明褐色土(5層)が堆積し旧耕作土の重層がみられた。その下に淡黄灰色砂(10層)・淡黄褐色小砂礫(16層)・淡黄褐色粗砂(20層)などが堆積していた。東西壁および北壁の観察から、砂・小砂礫の堆積状況は南西方向から北東方向に流れた様相であった。砂層の上位から須恵器片・土師器片が出土した。断面観察後、重機により北部で標高10.5mまで掘削したが安定した面はなく、砂・小砂礫が互層となっていた。砂層から土師器の小片が出土した。小片のため図化していない。

3 トレンチ 2 トレンチの南の水田に設定した3×6mのトレンチである。地表面の標高は約13mである。標高11.4mまで掘り下げたが遺構は検出していない。トレンチ西壁の堆積状況は、暗灰色土(耕作土)・黄褐色土(床土)の下に、3 トレンチ同様に茶褐色土(3層)・濃茶褐色土(4層)が堆積し旧耕作土の重層がみられた。その下に薄い明褐色土(5層)と鉄分・マンガンなどが凝固した黒褐色土(6層)が堆積していた。この下に淡茶褐色小砂礫(7層)・黄灰色砂(8層)・淡茶褐色砂(9層)・淡黄灰色小砂礫(10層)などが堆積していた。淡黄灰色砂(11層)・黄灰色小砂礫(12層)から土師器の小片が出土した。小片のため図化不能である。トレンチ幅が狭いため下層の掘削は行っていない。

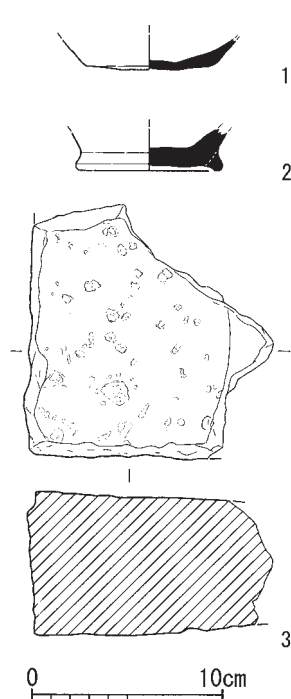
4 トレンチ 鳥取橋から南320mの地点で、3 トレンチの南の水田に設定した5×10mのトレンチである。地表面の標高は約13.2mである。標高11.7mまで掘り下げたが遺構は検出していない。

トレンチ西壁の堆積状況は、暗灰色土(耕作土)・黄褐色土(床土)・灰褐色土(床土2)の下に、暗灰褐色土(4層)・濃黄褐色土(6層)・暗灰褐色粘質土(7層)が複雑に堆積していた。南西方向からの流入と思われる。その下に北で暗灰褐色砂(8層)・黄灰色砂(9層)・淡黄灰色砂(10層)など、南で暗黄褐色小砂礫(15層)・茶褐色小砂礫(16層)が堆積していた。これらの下に淡黄褐色粗砂(17層)が堆積する。壁面精査中および淡黄褐色粗砂から土師器小片が出土した。断面観察後、重機により南端で標高10.3mまで掘削したところ、湧水がみられた。下層に淡黄褐色砂・赤褐色砂・黄灰色砂が堆積するが安定した面とは思えない。黄灰色砂層から土師器の小片が出土した。出土した土師器小片はいずれも図化不能である。

5 トレンチ 4 トレンチの南南西の水田に設定した5×10mのトレンチである。地表面の標高は約13.2mである。標高11.7mまで掘り下げたが遺構は検出していない。トレンチ西壁の堆積状況は、暗灰色土(耕作土)・濁灰褐色土(床土)・濁黄褐色土(床土)・黄褐色土(床土)の下に、旧耕作土の暗灰褐色土(5層)が堆積する。その下に濃灰褐色土(6層)・茶褐色土(20層)・灰褐色土(21層)・淡茶褐色土(7層)が堆積する。この下に南では、茶褐色小砂礫(8層)・暗灰褐色砂(9層)・灰褐色砂(10層)・淡灰褐色細砂(11層)・灰褐色細砂(12層)・濁黄褐色粗砂(13層)・淡黄褐色砂(15層)などが堆積する。中央では灰褐色細砂の下に淡褐色砂(17層)・淡黄褐色粗砂(16層)が堆積する。北では淡灰褐色細砂(11層)の上に淡灰褐色細砂(23層)・暗灰色砂(24層)が堆積する。東西壁および南壁の堆積状況を観察すると、南西方向から北東方向に流れた様相であった。淡黄褐色砂(15層)・淡黄褐色粗砂(16層)から土師器の小片が出土した。壁面観察後トレンチ南端を重機により標高10.2mまで掘り下げたところ、淡黄褐色砂(15層)の下に淡灰色砂・淡赤褐色砂・黄灰色砂が堆積し、湧水がみられた。黄灰色砂から土師器の小片が出土した。いずれも小片で図化できない。

6 トレンチ 鳥取橋から南370mの地点で、5 トレンチの南西に設定した5×10mのトレンチである。6 トレンチを設定した場所から南側は約180mにわたって、いわゆる島畑のように周囲の水田面より約0.6m高くなり、畑地として利用されている。トレンチ西壁の堆積状況は、暗灰色～灰褐色土(耕作土)の下に暗黄褐色土(2層)・暗茶褐色土(3層)・茶褐色土(4層)・褐色土(5層)・黄褐色土(6層)・濃茶褐色土(7層)が堆積する。明瞭な床土はなく、耕作土が重層したものであろう。その下に褐色砂(8層)・暗茶褐色粗砂(9層)・暗黄褐色粗砂(10層)ほかの砂層が堆積する。砂層の下に暗灰色粘質土(16層)が堆積していた。トレンチ西半分の暗灰色粘質土面で精査を行ったが、遺構は検出されなかった。また、暗灰色粘質土より上位の砂層からの湧水が激しく下層の掘削を断念した。一部の深掘りで暗灰色粘質土は0.2m以上あることがわかった。遺物は出土していない。

7 トレンチ 6 トレンチの南に設定した6×10mのトレンチである。東壁の状況は、6 トレンチ西壁と同様に、暗灰色～灰褐色土(耕作土)以下、黄褐色土(6層)まで同じ堆積状況である。黄褐色土(6層)の下に淡灰褐色土(7層)・茶褐色粘質土(8層)・灰褐色砂質土(9層)・灰色砂質土(10層)が堆積する。その下に淡黄灰色砂(12層)・淡灰褐色砂質土(13層)・淡灰褐色細砂(14層)・黄灰色砂(15層)が堆積する。砂層の下が暗灰色粘質土(16層)・暗青灰色粘質土(17層)となる。暗



第5図 出土遺物実測図

- 灰色粘質土上面で精査を行ったが、遺構は検出されなかった。北部の
- 1 暗灰色粘質土上面から凝灰岩が、淡灰褐色細砂(14層)・黄灰色砂(15層)から土師器碗が出土した。西側断面の掘削中に黄褐色土(6層)から土
 - 2 師器の底部が出土した。土器は周辺から流入したものであろう。

3. 出土遺物

出土遺物は、土師器・須恵器・陶磁器などの小片が多く、合計して整理箱に1箱である。以下に実測できたものについて記述する。

1は7トレンチの淡灰褐色細砂(14層)または黄灰色砂(15層)から出土した土師器碗である。胎土に0.5mm程度の白色・灰色の砂粒を含み緻密で、焼成は良く、にぶい橙色を呈す。底部はヘラ切りで、内面にロクロ成形の痕跡をとどめる。底径6.6cm。13世紀以降のものである。

2は7トレンチ西断面の黄褐色土(6層)から出土した土師器杯または鉢の底部である。胎土に0.5mm程度の白色の砂粒を含み緻密で、焼成は良く外側が淡茶褐色を呈し、断面をみると黒灰色を呈す部分がある。

底部に横に張り出した高台を貼り付ける。底部径7cm。13世紀以降のものである。

3は7トレンチの暗灰色粘質土上面の砂層から出土した凝灰岩製の石製品である。最大長13.3cm、最大幅13.1cm、厚さ7.7~6.7cmを測る。板状の素材を方形に切り出した後、表面を敲打して整形している。塼状を呈する。

4. まとめ

今回の調査は、鳥取橋遺跡における2回目の調査で、先述のように、各トレンチとも安定した面がなく遺構を検出していない。出土遺物も整理箱に1箱と少量であり、小片であるため図化できるものが3点しかなかった。土器はいずれも河川堆積の砂層などから出土している。

各トレンチとも耕作土の下に旧耕作土の層序が幾重にもみられることから、耕作土面のかさ上げが何回か行われたことがわかる。旧耕作土の下位には砂・小砂礫などが堆積しており、2・5トレンチの断面観察では、南西方向から北東方向に流れた様相が認められた。4トレンチでは、暗灰褐色土(4層)・濃黄褐色土(6層)に暗灰褐色粘質土(7層)が混じり、上流(南西)から耕作土などが押し流された様相であった。これらは木橋川により運ばれたものであろう。

鳥取橋遺跡推定範囲の南部に相当する2~5トレンチでも安定面は確認されず、出土遺物も少量で小片であった。今回の調査地は、竹野川と鳥取川・木橋川の合流地点にあたり、遺構面は周辺に存在しない可能性が高く、下流側の鳥取橋周辺に遺構・遺物の広がりがあるものと考えられる。また、6・7トレンチでは、暗灰色粘質土面で遺構が検出されなかったが、暗灰色粘質土が周辺に広がり安定面を形成していたと考え、周囲から若干高い島畑状の場所にかつて生活面が存在していた可能性もある。

版 圖

(1) 調査前、鳥取橋西詰より
南を望む(北から)



(2) 1 トレンチ全景(西から)



(3) 1 トレンチ東壁断面(西から)





(1) 2トレンチ全景(北から)



(2) 2トレンチ西壁断面(東から)



(3) 3トレンチ全景(北から)

(1) 4 トレンチ全景(北から)



(2) 4 トレンチ西壁断面(東から)

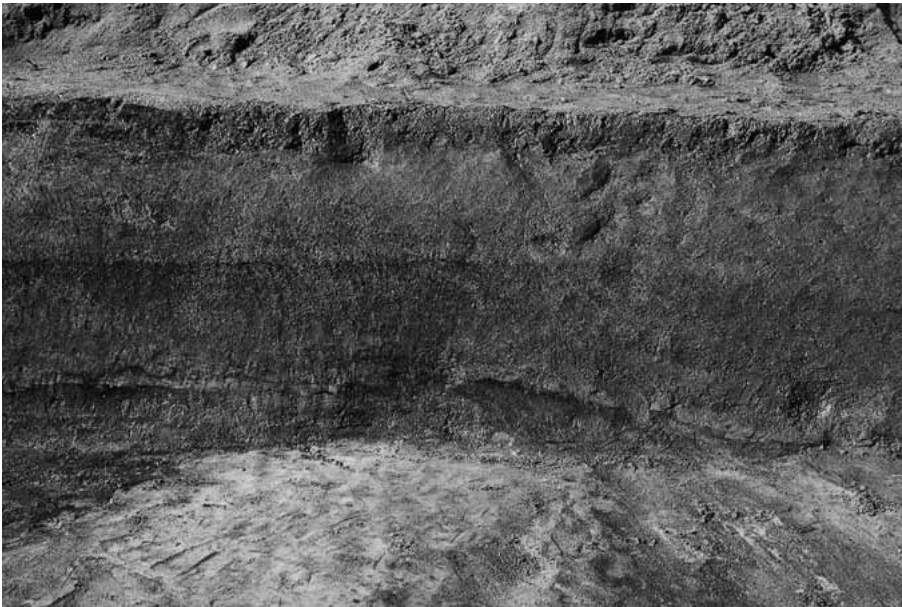


(3) 4 トレンチ南部、下層掘削状況
(北西から)





(1) 5トレンチ全景(北から)



(2) 5トレンチ西壁断面(東から)

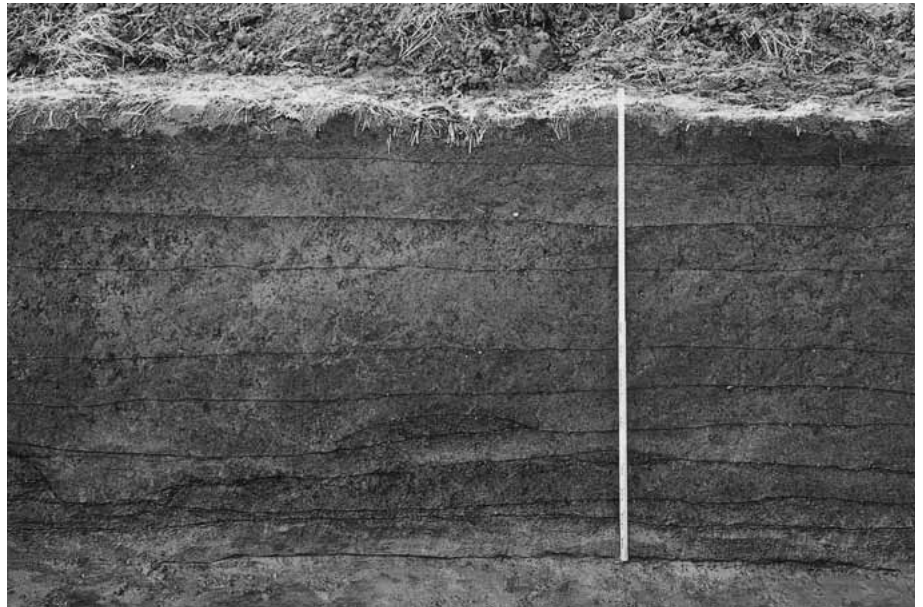


(3) 5トレンチ南部下層掘削状況
(北東から)

(1) 6トレンチ全景(北から)



(2) 6トレンチ西壁断面(東から)

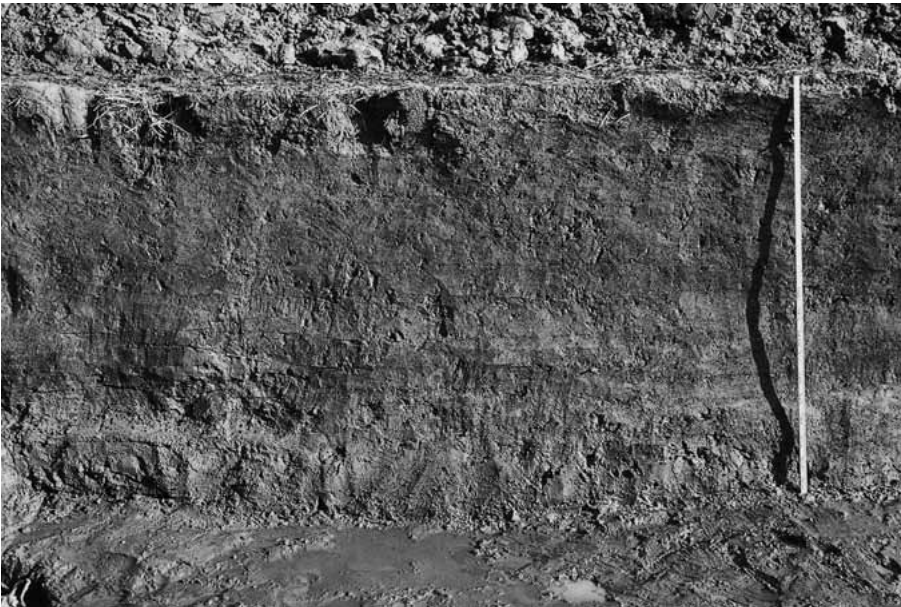


(3) 7トレンチ重機掘削(南から)

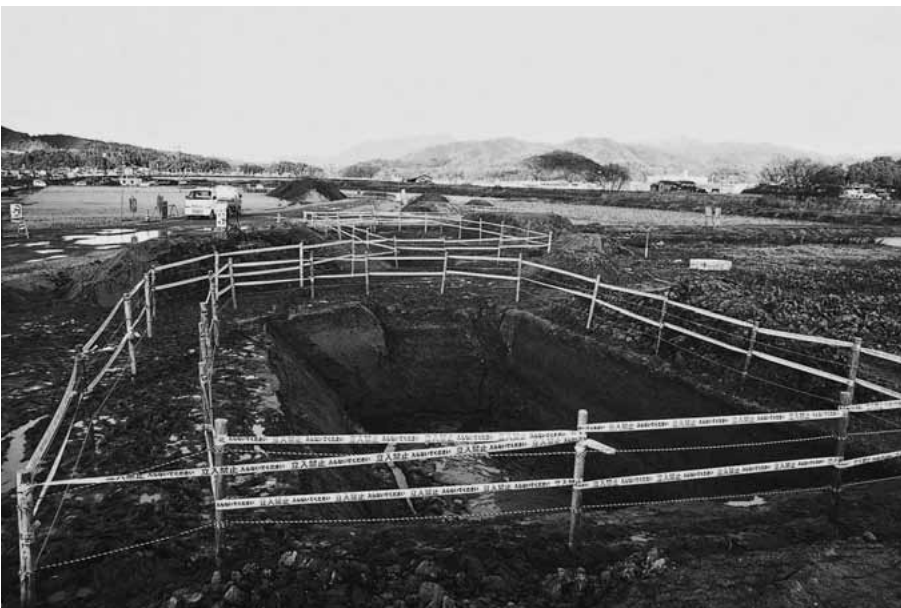




(1) 7トレンチ全景(北から)



(2) 7トレンチ東壁断面(西から)



(3) 7トレンチから北を望む
(南から)